

薬物療法が奏効する整形外科疾患

筆者が研修医だった時代には、「どうして医学部・医師を目指したのですか？」と若い医師に質問すると、「ブラック・ジャックにあこがれて医師になりました」という返事がお約束であった。ブラック・ジャックとはすなわち外科医ということである。今でも医療系のドラマやマンガでは、主人公の多くが外科医である（と思う）。整形外科疾患の分野においても、外科的治療に脚光があたることが多い。人工関節置換術に代表されるように、問題のある部位を一気に修復してしまう外科的治療は、話が早いし見た目もダイナミックである。成功すれば、患者の満足度も医師の満足度も高い。そもそも薬物療法に興味があるような人は整形外科の門を叩きませんよ、と言われればそうなのかもしれない。よしんば興味があったとしても、整形外科疾患の代表である変形性関節症や腰部脊柱管狭窄症などはいまだに有効性が確立された薬物療法は少なく、重症例に対しては手術頼みではないか。

しかし時代は急速に変化しており、医療の進歩は日進月歩である。ゲノム研究などの進歩によって、日々多くの疾患の病態が分子レベルで解明されており、原因遺伝子を標的にした治療法が次々と開発されている。整形外科以外に目を向ければ、これまで治療法がないと考えられていた多くの神経変性疾患に対して、アンチセンス治療薬など画期的な治療薬が登場している。元々は白血病などの血液癌に対して開発されたCAR-T細胞（キメラ抗原受容体T細胞）療法は、現在では難治性の自己免疫疾患などへ応用範囲が拡大しそうである。血友病に対しては遺伝子治療薬も出てきそうだ。このような、いわば「分子のメス」を医師が手にしつつある時代において、薬物療法に興味をもたないのはどう考えてももったいないでしょう！ ということで今月号の特集では、骨粗鬆症や関節リウマチなど、既に多くの有効な治療薬が存在する疾患のみならず、これまで有効な治療法が存在しないと考えられていた希少疾患についても、画期的な治療法が現れつつある現状を紹介していただいた。この特集号を読んで、薬物療法に興味をもってくれる整形外科医が一人でも増えることを期待している。

（田中 栄）